

日本人の会話表現 — — — 終助詞

王玉鑾

はじめに

外国人の私達は、日本語の終助詞の使い方には、いつも迷ってしまう。例えば、終助詞『よ』より終助詞『の』を使ったほうがいいのはどんな時なのか。その上、女性と男性を区別する言葉もある。日本語が下手な私は日本語の文法、漢字を勉強しながら、日本語の会話表現も勉強しなければならない。このレポートを準備する前には、終助詞の意味・使い方はほとんど知らなかったが、このレポートを書くために、たくさんの資料を読み、その中で多くのことを学ぶことができた。ほんとうによい勉強になったと思う。

終助詞の定義

「名」－ 文の終わりにあって、命令・疑問・反語・願望・禁止などの意味を決定し、または陳述の意味を強めたり、感動を表したりする助詞。・・・口語では、「な（禁止・感動）・か・とも・ね・さ・ぜ・ぞ」などの類。（国語大辞典 1974）

1. 終助詞『ね』、『ねえ』

国語辞典（1981）では、終助詞『ね』は「相手に同意を求める気持ちを表す」と説明している。しかし、小倉 肇（1985）の方は、もっと詳しくなって、「相手に同意を求めながら、軽い感動の意を表す」とある。『ね』を使う時、尻下がりのイントネーションで表す。

<例 1> A: 最近の物価の値上がりはひどいですね。
B: たばこもお酒も高くなりましたね。

(A: 話し手)

(B: 聞き手)

それに、終助詞『ね』は、伝えられる情報は話し手にだけでなく聞き手にも属す

(2)

ることもある。(和久井由紀子 1990) 小倉 肇(1985)は簡単に「相手にたずね、返答を促す意を表す」と説明している。ここに、『ね』という終助詞とほかの終助詞との違いがある。(〈例 1〉を参考にして下さい。)

また 終助詞『ね』には「相手に念を押す意を表す」という機能がある(小倉 肇 1985) 話し手が聞き手の注意を引きたい時、終助詞『ね』を何回も繰り返している。

〈例 2〉 A: ね・・・ね
B: 何。
A: きょうね。
B: うん。
A:

話し手は相手に強い気持ちを表したい時、『ね』から『ねえ』に変わる。

〈例 3〉 A: さむくなりましたねえ。
B: ええ。ほんとですねえ。

終助詞『ね』は「事の真偽などについて相手に確かめる気持ちを表す」ということがある。(国語辞典 1981) この時は 尻上がり調で表される。

〈例 4〉 A: 集合時間は八時ですね。
B: ええ そうです。

〈例 4〉のAが尻下がりのイントネーションの長呼による『ねえ』で表したら、会話の内容は自分の気持ち(不満)も含まれる。聞き手の返事にも同様な気持ちが述べられている。〈例 5〉と〈例 4〉を参考にして下さい。

〈例 5〉 A: あ、めぐちゃん 集合時間は八時ですねえ。
B: そうですねえ。 早いですねえ。

一方、小倉 肇(1985)によって、「男女ともに用いるが、接続上では多少異なる点があります。」それで、終助詞『ね』の男性語、女性語の接続の仕方が終助詞『よ』とよく似ている。(「終助詞『ね』・『わ』・『よ』・『の』について」を参考してください)。

男性語 (だ、かなど付く)	女性語 (わ、よなど付く)	共用 (です、ますなどつく)
そうだね そうかね	そうだわね そうよね	そうですね 行きますね

	男性語	女性語
名詞、副詞 - 過去型	熊 だ ね 熊 だったね	熊 ね 熊 だったわね
活用語 - 過去型	遊ぶ ね 遊んだ ね	遊ぶ わね 遊んだ わね
活用語 (形容動詞) - 過去型	静かだ ね 静かだったね	静か ね 静かだったわね
活用語 (形容詞) - 過去型	高い ね 高かった ね	高い わね 高かった わね

よって 要約すれば終助詞『ね』また『ねえ』を使う時、これは相手に同意を求め
る気持ちや事の真偽を確かめるきもちなどを表す。

2. 終助詞『わ』

『わ』という終助詞は主として女性に用いられるが若年の男性（老壮年以外）はあ
まりつかわない。なぜなら、鈴木丹士朗（1968）によると『わ』は「軽い詠嘆、感
動や決意、主張の気持ちを込めて、話の内容をやわらげたり、また刺激のない、やわらか
な感じを表す」という定義があるからである。また 国語辞典（1981）では「（女
性語）- 自分の、主張（判断）などを相手に納得させたり、じぶんで確認したりする気

(4)

持ちを表す」と説明している。だから、『わ』を使うと 口調がやわらかくてやさしい感じがする。つまり、女性らしい感じがするのである。

しかし、小倉 肇（1985）によると「男性（老壮年）にも用いられることがあり、一部の方言（札幌など）では若年も、親しい人に対しては用いているようである。また、最近の流行語的用法として【よく言うわ。】のように若年の男性が用いる」ということだ。つまり、男性も用いるけれども、女性ほど多くないということである。

終助詞『わ』のほかの機能は「驚きや軽い感動、詠嘆の意味」も表すことがある。（鈴木丹士朗 1968）特に 強い驚きの気持ちを表す。

次の例をごらんになって下さい。

a) 女性語 - 自分の、主張（判断）など

A: このデザイン、すてきだわ。

B: そうね。

b) 驚きや軽い感動

A: あら、これ、こわれているわ。

B: ほんとだ。いつこわれだんだろ。

（和久井由紀子 1990）

c) 男性語

A: びっくりしましたわ。 （『まね-四天王』という番組から）

だから 終助詞『わ』 - 自分の、主張（判断）することや驚きや軽い感動などを表すことがある。

3. 終助詞『よ』

和久井由紀子（1990）によると『よ』は 「話し手が、聞き手の知らない情報であると認識できる情報を聞き手に教示す」と説明している。陳常好（1987）の方で

も同じ指摘があるが、もっと詳しく、「話し手がすでに認識し聞き手がまだ認識していない情報について、話し手が聞き手に対して伝える必要があると判断して伝えるときに使われる終助詞である」と記述している。

- 〈例 6〉 A: まあ ひさしぶり。ずいぶん黒くなったわね。
B: ええ。海へ行っていたの。少し泳げるようになったのよ。

それから 終助詞『よ』は 「命令、依頼の気持ちを少し強める意を表す」 こともある。(小倉 肇 1985、吉川泰雄 1968) しかし、このとき、口調はちょっと乱暴になる。

男性語

- A: 見えないよ。前のひとはすわれよ。
A: 早くしろよ。
A: ちょっと 待ってくれよ。

女性語

- A: すわってよ。
A: 早くしてよ。
A: 待ってよ。

終助詞『よ』は男性女性ともに用いるが用法上相違がある。(小倉 肇 1985) 次のモデルをごらんになって下さい。

	男性	女性
名詞、副詞 - 過去型	熊 だ よ 熊 だったよ	熊 よ 熊 だったわよ
活用語 - 過去型	来る よ 言った	来る わよ 言った わよ
活用語 (形容動詞) - 過去型	静かだ よ 静かだったよ	静か よ 静かだったわよ
活用語 (形容詞) - 過去型	高い よ 高かった よ	高い わよ 高かった わよ

以上の例を見たら、女性が『よ』を過去型といっしょに使う時、必ず『わ』をつけ

(6)

ているということがわる。男性の場合は、“だった”だけつけている。

終助詞『よ』は、強く訴えたり、説き聞かせたりする意を表す時と命令、依頼を表す時に使うことができる。

4. 終助詞『の』

終助詞『の』は、小倉 肇（1985）によって、「軽い断定の意を表す。主として、女性が語調をやわらげる場合に用いる」と説明されている。尻下がりの弱いイントネーションで使う。

<例 7> A: めぐちゃん、これ？
B: いいえ 違うの。

国語辞典（1981）と 鈴木丹士朗（1968）の説明では、終助詞『の』は、女性と児童だけが使える。しかし、和久井由紀子（1990）の論文の中では、男性も終助詞『の』をよく使うと書いてある。この時、使う口調が尻上りイントネーションになる。また 小倉 肇（1985）は 終助詞『よ、ね、さ』を『の』に加えた『のよ』『のね』『のさ』の形になると、女性語は『の』、『のよ』、『のね』、男性語は『のさ』を使うと述べている。『のさ』は 相手に念を押す場合によく使う。

<例 8> 女性語 - どうしているのかしら。全然連絡がないのよ。

男性語 - きっと いそがしくしているのさ。
- 君も 行くの。

一方、上昇調（尻上がり）のイントネーションを使う時、「相手に問いかける意を表す。疑問詞（どこ、なに）などを伴う場合も多い。」という機能もある。（鈴木丹士朗 1968）

<例 9> A: あしたのパーティー、行くの？
B: ええ、行きます。

また 小倉 肇（1985）も 終助詞『の』は 「相手の行為をうながしたり、

説得させようとしたりする意を表す。」と指摘している。しかし、鈴木丹士朗（1968）の説明がもっと詳しく、「積極的にある行為をするように促したり、拒否や禁止などの命令表現を表す場合に用いる。目下に対して用いたり、母親が子どもに対していったりする場合で、強いイントネーションを伴う」ということがある。

<例 10> 母： テレビばかり見ていないで、すこし運動するの。

だから 終助詞『の』は、女性語、児童語だけではなくて、男性にもよく用いられる。しかし、この時、『さ』を付けて、『のさ』に変わり、命令と軽い断定の機能もある。

5. 終助詞『ね』、『わ』、『よ』、『の』について

四つの終助詞の意味、使いかたを全部説明してきた。このうち『わ』を除く三つの終助詞『ね』、『よ』、『の』の似ているところと違うところを見てみよう。

まず、終助詞『ね』、『よ』、『の』は 男性にも女性にも用いられている。しかし、接続上では多少異なる点がある。下のテーブルをごらんになってください。（例は文章の中にある）終助詞『ね』と終助詞『よ』は接続がよく似ている。

	男性	女性
『ね』 - 名詞、副詞 - 活用詞 - 活用詞 - 形容動詞 - 活用詞 - 形容詞	熊 だね 遊ぶ ね 静かだね 高い ね	熊 ね 遊ぶわね 静か ね 高いわね
『よ』 - 名詞、副詞 - 活用詞 - 活用詞 - 形容動詞 - 活用詞 - 形容詞	熊 だよ 来る よ 静かだよ 高い よ	熊 よ 来るわよ 静か よ 高いわよ
『の』	ほんとうだったのさ	ほんとうだったのね 違うのよ

(8)

さて、女性が終助詞を使う時、口調がやわらかくて女らしさがでて、たぶんこれが女性語の特徴かもしれない。

また、終助詞が異なる場合、例えば 命令、詠嘆などを表す時、イントネーションが違うところがあり、終助詞『よ』と『の』は、命令という機能を使う時、イントネーションが強くなる。終助詞『ね』の場合、相手に念を押す意を表す時、注意を引きたくても、実はやわらかな命令である。〈例 2〉を参考にして下さい。

終助詞『よ』と『ね』のもう一つ似ている点は、推量型『でしょう』『だろう』と共起することができる点である。なぜなら、終助詞『よ』の機能は、話し手が、聞き手の知らない情報であると認識できる情報を聞き手に教示するからだ。

〈例 11〉 A: めぐちゃん、まだ来ていない。
B: ええ。でも、ちょっと待ちましょう。
A: もう 時間ですから、始めましょうよ。

〈例 12〉 明日 晴れでしょうよ。 \ 明日 晴れだろうよ。

終助詞『ね』が推量型『でしょう』『だろう』と共起できるのは、和久井由紀子(1990)の「終助詞『ね』が、聞き手の認識度が話し手と同じ、もしくはそれ以上であると話し手が推測し、同感の期待をすることを伝える機能を持つためと考えられる。話し手に予測が確実なものであるという根拠がなくとも、それを聞き手に委ねることができるから『でしょう』『だろう』と共起できるのである」と述べている。

〈例 13〉 A: タンさん、最近 元気がないようですね。
B: さあ、よく分かりませんが。
A: 何か心配事があるんでしょうね。
B: ええ、たぶんね。

ところで 終助詞をうまく使いたい時、必ず意味、機能、女性語、男性語をはっきり理解しなければならない。表面的には 難しそうであるけれども、よく使えば使うほどだんだん上手になる。

おわりに

日本語でレポートを書くことは私にとって、これがはじめてである。書く時、一番難しかったのは 自分の考えることがなかなか日本語で表現できなかったことである。熊取谷先生をはじめ、ほか諸先生方、チューターの村上さん、韓国のピョンさんにご協力いただき、心から感謝したいと思う。

参考書

- 鈴木丹士朗 “第五章 終助詞” 松村明 編 『古典語 現代語 助動詞 詳説』
1968 大盛印刷 四版発行
- 吉川泰雄 “第五章 終助詞” 松村明 編 『古典語 現代語 助動詞 詳説』
1968 大盛印刷 四版発行
- 小倉 肇 “第五章 終助詞” 鈴木一彦／林 巨樹 編集 『研究資料 日本文法
⑦助辞編（三）助詞、助動詞辞典』 1985 明治書院
- 金田一京助 『新解明 国語辞典』 1981 三省堂
- (他)
- 『日本 国語大辞典 第十巻』編集 日本大辞典刊行会 1974 小学館
- 陳常好 「終助詞－話し手と聞き手のギャップをうめるための文接辞－」 『日本語学』 10月号 1987
- 和久井由紀子 『談話行動における終助詞の考察』－ 広島大学教育学部－卒業論文
1990